
東方巨漢譚

門倉鐘

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

東方巨漢譚

【Nコード】

N6708X

【作者名】

門倉鐘

【あらすじ】

世界中を旅する2メートル超の巨漢ジョージ・サンランド。日本に訪れた彼を待っていたのは、幻想郷という名の非現実的な現実だった。豪快だけれど繊細で。情けないけれど頼もしくて。恐ろしいけれど優しく。でっかいけれどちっぽけな一人の人間。これは妻子持ちのおっさんとうら若き(?)少女たちが織りなす物語である。

こちらは同作者の未完作品「東方巨漢紀行」

を一から書き直した物になります。オリジナル主人公かつ能力持ちではありませんが、基本的にバトルや恋愛要素はありません。いい年

したおっさんが少女たちに翻弄されつつ幻想郷を満喫するお話です。

1話「ビッグトラベラー」(前書き)

一年以上も隔てて、二度目の開幕と相成ります。

あらずじにも書きましたが当作品にバトル・恋愛は基本ありません。なんせ主人公は一般人でおっさんです。

それでもお付き合い頂けるのでしたら、どうぞよろしくお願います。

1話「ビッグトラベラー」

小さな洒落た喫茶店に周囲の目を引く男性客がひとりいた。どうやら会計の最中のようで、男はサイフから硬貨を取り出し出している。あれでもない、これでもないと何度もコインを出し入れする。先ほどからその手には世界各国の、多種多様な通貨が現れては消えていた。

店内にいる他の客はこぞって男を覗き見る。表の通りを往く通行人たちも何気なく店の中に視線をやり、そこに男の姿を見ると誰もが驚愕に目を開き注視する。中にはわざわざ立ち止まり携帯電話のカメラ機能で写真をとる者もいる。

男の格好はお世辞にも綺麗とはいえなかった。シャツ、ズボン、ブーツ、ダツフルバッグ、腕に提げたコート、そして取り出しているサイフ。身に着けている物は皆一様に薄汚れ、色あせていた。そのくせやたら丈夫なのか、破れたりほつれたりしている物は一つとしてないのだから、どれも一流品なのであろう。

世界中のお金や使い込まれたらしい汚れた衣服は、男が旅人であることを雄弁に語っていた。

だが、それは別に男を注目的にする理由ではなかった。

「いや、すまんね。日本円はどこに行っちゃったのかな」

店員がまじまじと見るのを催促だと思ったのか、男は謝罪を口にした。その声は低く深く重い見事なバスである。重厚な低音は威圧感と、それに反する安心感と信頼感を内包していた。

同時に、口にされた言葉が流暢な日本語であったことに店員は少し驚いた。何故ならこの男はどう見たって日本人ではないのである。短く切りそろえられた金髪は鈍く輝く。鋼のような光によってその強さは目に見えるようである。澄んだアイズブルーの瞳は美しく、ひとつ間違えれば酷く無慈悲な印象を与える。だがよくよく見れば下がった目尻は優しげで、酷薄さを緩和させていた。目の形自体は

下手をすると好色な感じがしただろうが、そちらはそちらで蒼氷色の瞳によって均整が取れているのだった。

事実、男はアメリカはサウスダコタ州で生まれ育った生粋の米国人であった。

だがしかし、男が注視される原因は異国人であることやなめらかに日本語を口にしたことにあるわけでもなかった。

「お、あつたあつた。待たせてすまんね。はい」

多種の硬貨が雑多に入ったサイフから目的の物を見つけ出しつまみ出す。数枚あるそれらは店員が数えやすいようにカウンターの上に並べて置かれた。慌てたように店員が確認してみれば料金ぴったりの金額である。

「あ、はい。えっとちようどいただきます」

「ごちそうさん」

男は満足そうに頷くと、横に置いていたダツフルバッグを肩に担ぎ上げて微笑んだ。店員ははるか頭上の笑顔を見やり、何故か達成感を感じると、まるで敬礼するかのように頭を下げた。

「ご来店ありがとうございます！」

「うん。また来るよ」

男は扉へと振り向き歩き出す。のしりと、一歩ごとに空気が震える。ガラスの向こうで男を覗いていた人々は、一様に引きつった顔になり逃げだした。それに一瞬傷付いた表情を浮かべるも、気を取り直しドアの前に立つ。

目の前のドア枠を小さくにらみ、男はぼやいた。

「……………やっぱせまいなあ」

決してこの店のドアが小さいわけではない。むしろやや不必要に感じるほど、上方向に余裕を持たせたガラスドアである。

だがそれでも、避けずに進めば男の頭はドア枠にぶつかってしまっただろう。

衆目が集まる理由は正に男の体躯にあった。

身長240センチメートル、体重170キログラム。

男はただ背高なだけでなく、鎧とでも呼ぶべき筋肉を身にまとっている。岩を積み上げて造られたかのような身体である。パーツのひとつひとつがとにかく巨大で人間というよりは精巧な彫像だとか、ゴーレムだとかいわれたほうがよほど納得できるだろう。

しかし男は真正正銘、ただの人類なのである。

彼の名はジョージ・サンランド。

口さがない彼の友人などはジョージをこう呼んだ。

“タイタン（巨人）”、と。

喫茶店のガラス製ドアを巨漢が押して開く。同時に、冷気を帯びた風が店の外へと流れ出した。

店先を行き交う人々は額に汗を浮かばせて、足早に通り過ぎてゆく。たたり、と垂れた汗はアスファルトに吸い込まれ、蒸気となって立ち昇る。

扉を開いたジョージは日本の夏の光景に顔をゆがませた。

涼しい店内を名残惜しげにしながら、彼は一步前へ踏み出した。

あまりにも背が高いので頭をドアの枠に打たないよう気を付けながら足を出す。

それがいけなかったのだろうか。

上を見るばかりでおろそかになった足下が、わずかな段に突っかった。

「うおっとお！？」

手にしていたコートがゆるやかに宙を舞い、ダツフルバッグはぶん投げられた。

素っ頓狂な悲鳴を上げてつんのめる。２メートルを軽く超え、鍛え盛り上がった筋肉を持つ彼がつまりずく様は、さながら大木が倒れるようである。

風を切り空を震わせながら豪快に倒れこむ巨体。しかし巨漢はとつさに逆足を走らせ、地を踏み鳴らす。そして片足で見事に踏み止まった。

突然展開されたこの珍事は、しかし中々に大迫力かつ高難度な芸当でもあった。何故ならこの男、体重が170キログラムもあるのだから。口で言うのは簡単であるが、これほどの重量の人間しかも身長約2メートル半　が一本で自重を支えるには生半可ではない力とバランス感覚を必要とする。それを焦りこそすれ、苦もなくやってのけたことはそれだけで称賛に値するものだ。

だが、彼に感嘆や野次を向ける者は誰一人としていなかった。

ジョージは俯いたまま、恥ずかしそうに右手を自らの頭にやった。そしてぼりぼりと軽く搔きながら照れ隠しに小さく笑う。

「たはは。いやあ、かつこわるいなあ」

ほがらかな苦笑いを浮かべながらまるで恐ろしいとでもいうように目をつむる。豪快な見た目に似合わず、繊細さが見て取れるいささか情けない動作である。

実際、彼は内心羞恥しながらも、あからさまに嗤われなかったことに大層安堵していた。

ごまかし笑いを続けながら立ち上がるうとし、彼は手に土が付着したことに気がついた。もしやと思い膝を見れば案の定ズボンにも汚れがある。慌ててコートを拾い上げ、やはり汚れを確認すると嘆きを隠そうともせず深いため息を吐いた。

ジョージの規格外の体に合う服は基本一般に販売されていない。必然的に彼が身に行っている物はほとんどが特注品であり、とっさに替えがきかないのだ。

幸いというべきか、シャツはともかくズボンとコートは黒味の深い紺碧だったのでそこまで汚れが目立つわけではない。

繊細ではあるがあまりよくよしないのがジョージという男である。

まず手を払い、まあいいかと気を取り直そうとして　。

(……あれ、土?)

異変に気づいた。

つい先ほどまで利用していた喫茶店は大都市とは言えないまでも、

街の中央あたりに位置していた。街自体は自然が存在しないほど人の手が加えられている。当然ながら喫茶店の周囲も完璧に舗装されていた。

土などあるわけないのだ。

店先で地べたに転んだとて衣類に傷付きこそすれ、土汚れがつくことは滅多にないのである。

そしてジョージは愕然とした。

今落としている視界に映るものは、まごうことなき土の、自然のままの地面である。それ自体はなんら珍しいものではないが、この場でそれを認めることはとてもできたことではない。

何故なら。

(私は、街に、いたんだぞ！)

未だうつむいたままジョージは身を震わせた。彼の粘り強いが打たれ弱い精神は急激に恐慌状態に置かれていた。

すっ転んだ時とは別種の悲鳴を上げそうになり喉がおかしな音を立てた。いつそ大声でわめいてしまおうか、そう思い耐えられず叫ぼうとして。

周囲が静かすぎることにようやく思い至った。

雑踏の音、話し声、人々が行き交う音、車両の走行音。あらゆる喧騒。

街にあるべき、実際あったはずの音がすべて消失していた。

人は極限の状態に置かれるとかえって冷静になることがある。その正体は諦めであったり、恐れを超えた畏敬であったり、ひたすらに無心であったり様々である。

この時のジョージもまた極度の緊張の果てに、逆に覚悟を決めたのだった。

先程までの震えが嘘のようにジョージは毅然と立ち上がった。そしてきつく閉じていた目蓋をあっさりと開き、周囲の様子を確認す

る。

目に入ってきた景色は不可思議なことに、しかし彼が懸念した通り街から遠くかけ離れたものだった。

鬱蒼と茂る木々、日を遮る青葉、地に根を露出させた大樹、瑞々しく広がる土、姿が見えない生物の息づかい、生命の青々しいにおいがする空気。

明らかに人工物が存在しえない自然の気配。どのような超常の力が働いたのかも知れない山中の森にジョージはひとり立っていた。

自分がどこにいるのかもわからないことを確認したジョージは次に後ろを振り向いた。常識的に考えれば、彼は喫茶店から出てきたところなのだからそこには喫茶店が存在するはずである。もし万が一あのガラス扉が最先端の科学の結晶で、その正体が転送装置だとすれば、落ち着いてもう一度店内に戻れば万事解決するのだ。

しかしながら、やはりというべきか、そこには何もなかった。

ジョージの体にはいささか小さすぎる扉も、「またお越しくださいます」と言っていた気がする店員も、そもそも消えるはずのない店自体が見当たらない。不動産とは文字通りに動かないから不動産なのだ。店がないということはつまりジョージの方が移動した、ということになる。

だが移動したと一口に言っても、この状況は人が転ぶ一瞬で移動できる範疇ではない。ならばジョージが超常の力を行使したということになるが、彼はあくまで異様に巨大なだけであって歴としたただの人間である。

これはどう考えても常識の埒外の非常事態だ。

以上のことを鑑みてジョージは得心行ったように大きくうなずくと決然としてつぶやいた。

「こりや夢だな」

現実逃避であることは重々承知しつつありあえず自身の頬をつねる。そしてこの夢は覚めない類のものだと知ると、大きく肩を落としたのだった。

2話「天狗風」(前書き)

自分には速さがたりないっ！

2話「天狗風」

朝焼けに光る幻想郷の天空を舞う影がひとつ。背に一对の黒い翼を生やしたそれは風を置き去りに飛行する。弾丸となり空気の壁を切り裂くそれは、ひとりの少女であった。

少女は高高度から眼光鋭く地上を流し見る。特徴的な赤い瞳も相まって、その様はまさしく獲物を探す狩人である。疾風を身にまとい風よりも速く飛翔する彼女の視界では、すべての風景が引き伸ばされ線となつて消えていく。それでも彼女には目に映るものが理解できているのだった。

不意に少女の口元が歪み笑みの形を作った。何かを求めさまよつていた視線は地上のある一点に留められている。

少女は動きを止めることなく真上へと急上昇する。刹那宙に身を泳がせ、くると身をひるがえし、次の瞬間には目的地へ向け急降下を開始した。

音速すら超えてしまいそんな世界の中で少女はただ可憐かつ獰猛に微笑んだ。

朝もやただよう山中の森をひとりの大男がのしと歩いていた。分厚い手で顔にかかる枝を払い柱のような脚で前へと進む。疲れた表情には悲壮感が浮かんでいるが、身に秘められた力強さはいくらも損なわれることなく、鋼の体躯は止まることを知らないようである。

その大男、ジョージ・サンランドは今にも泣きだしそうな心境でいた。彼が現実を認めたとあの時からかれこれ12時間、彼は眠りもせずに未知の山中にいたのだ。

あの後、転んだ時に手から放してしまったダッフルバッグを探してみれば、どうやら一緒に空間を飛んできたようで、少し離れた茂みに埋もれているのを発見した。中身が無事かどうかを確認し終わ

る頃になるとすでに日は暮れかけていた。慌てて上着のポケットから腕時計を出して確認すれば、午後6時を大きく回っていた。喫茶店を出る直前には5時半近くだったので仕方がないかもしれない。仕方がないのかもしれないが、まったく知らない環境において夜を迎えるというのは最悪に近い状況でもある。

結局ジョージは無理に歩き回ることはず大人しく一夜を乗り切ることにした。無論何があるかわからない中で眠るわけにはいかず、一晩中たき火の世話を見ることで獣を避けつつ暖を取った。幸いなことにバッグにはいくらかの非常食を入れていたので栄養摂取もできた。

そして日も昇らぬうちに行動を開始して今に至るのであった。

あまりにも突発的な事態の対処としてはまずまずな出来ではあったが、とてもではないが幸先がいいとは言えない。

現在位置がわからない、心理状態はパニック手前、体調をくずしてはいないがすでに一徹、物資補給の当てもない、安全の確保もできておらず、協力できそうな他人はいない。そもそも一体全体何が起こったのか皆目見当が付かないことが致命的だった。

歩き出してからゆづに3時間は経過している。その間に得た情報といえば、手品やドツキリの類ではなく正真正銘本物の山にいるらしいことが一つ。太陽の昇る様子や時計の針との位置を確認してみると、少なくとも日本のどこかではあることが一つ。そして最後に、それにしても見たこともない植物が自生していること。

以上のことを総括して、ジョージは現在の状態および一連の出来事を、原因不明の超常現象もしくは東洋の神秘として深く考えないことにした。

その上で彼は当面の目標を危機的状況からの脱出に定めたのであった。ある程度サイバル技術を修めているジョージではあったがそうは言っても長期間生活できるほどではない。さらに頭の痛いことに、日本には2日前に到着したばかりでナイフのような刃物は一切持っていない。これが東南アジア諸国を旅した流れでの来日であ

つたなら話は別だったかもしれない。しかし今回は一度中国の拠点に寄った後での訪問だったので、危険物と判断されるような物は置いてきてしまったのだ。無論、銃など持っているわけがない。

考えるほどに滅入りそうになりながら、ジョージは一度立ち止まった。おもむろにバツグを肩から下ろし、棍棒のような水筒を取り出し唇を湿らせる程度に水を飲む。彼の持ち物は彼自身の体格に合わせて何もかもが通常の約二倍ほどの巨大サイズである。水筒もまた巨大であり、必然的に持ち運べる水の量もかなりなものになる。体格相応の水分を必要とするジョージではあったが、節約しながら飲むことを考慮すると中々に頼れる保持量ではあった。

水筒をバツグの中にしまうと彼は大きく伸びをする。休息が必要だ。漠然と思うと、彼にも手頃な大きさの木を見つけ、寄りかかりながら腰を下ろした。

ふつと一息を吐く。

そうして落ち着いて初めて、どうやら鳥が鳴き声をあげているらしいことに気付いた。夜は獣を避けるためにも火をおこしたが、実際に植物以外の生き物の存在を感じたのはこれが初めてである。

ジョージはわずかながらも心強さを感じ、嬉しくなって顔をほころばせた。

「やっぱ鳥の声ってのは、いいねえ」

つぶやいてから、忘れていた心細さを思い出す。意図せず独り言が増えていった。

「こんな時はあれかね。鳥にならって歌えばいいのかな。気晴らしになるし。ああでも、よくへたくそって言われるしなあ。爺さんに嫌味言われたこともあったな。しかし、思えば、歌うってのはいい考えかもしれない。運が良けりゃあ誰かに見つけてもらえるかもしれない。私の声はやたらでかくてうるさいらしいな。よし！ そうだ！ 歌うか！」

むくりと巨体が立ち上がる。そして誰も聞いてはいない宣言にのっとり、高らかに声を上げようと大きく息を吸い込んだ。

それは突然のことだった。

今まさに歌おうとした一人の男の遙か頭上。木々を越えた先に広がる青空、その中にたたずみ浮遊する小さな人影。それがじつとジョージを見つめ、不意に彼目がけて急降下した。

人の呼吸によるものではない空気の流れ。一陣の風が場を強く、それでいて優しく涼やかに吹き抜ける。頬を撫でるそれにジョージは反射的に口を閉じ、深呼吸をやめた。

身構える暇もなく唐突に、その言葉は降って落とされた。

「あやややや。鬼か熊かと思ったら、人間ひとでしたか」

鈴を転がすような、軽やかではつらつとした少女の声。ジョージの発する重厚なバスとは対極に位置するソプラノボイス。

それはジョージにとって12時間ぶりに聞く他者の声である。

突如とした衝撃に息が詰まり、ジョージは身じろぎもせず硬直した。そんな彼の様子には気付きもしないかのように少女の声は続いた。

「シルエットだけでは人とは思えなかったのですが」

口調は優しく丁寧だが要旨は礼を失している、慇懃無礼の典型。

だがジョージにしてみればそんな無礼などどうでもよいことである。今何よりも大切なのは、自身以外に人がいたという、ただそれだけなのだから。

そしてこの声の主を逃してはならないと、ジョージは直感していた。何故なら2メートル半という巨大な、ともすれば怪物のような大男に物怖じせず声をかけるような人物は非常に少ないのだ。行く先々で人に逃げられる経験を山ほど積んでいる哀れな大男は、それをちゃんと理解しているのであった。

たとえ物珍しさゆえのパンダ扱いだったとしても、無視や忌避よりは遥かにマシなのだ。

奮然として辺りを見回し、少女と思しき人影を探す。ジョージのごつくも愛嬌のある顔は希望と期待に満ち溢れていた。

だがしかしである。

ぐるりと見渡してはみたものの、あるのは木々ばかりで人っ子一人いなかった。

呆然と立ちすくむ。

「里の方ではなさそうですね。失礼ですが……って、あや？ どうしました？」

声はすれど姿は見えず。

孤独、極限状態、閉塞的環境。これらがそろっている時に聞こえる「声なき姿」が何なのかジョージは知っていた。

希望と期待は一瞬で露と消え、失望と悲哀が取って代わって現れる。

そしてジョージはかすかにつぶやいた。

「……幻聴、か。ははは、本格的にやばいかなあ」

強く吹きつける風はジョージの心象を表しているのか。心なしかその勢いをわずかに増す。

ジョージは姿が見えぬその声を、自らが生み出した幻想だと断じた。断じて、それが彼の限界だった。

突然右も左もわからない森に一人きりで放り出され半日。ろくな休息を取れずとも、頑強な肉体とそれに宿る底なしの体力、そして持ち前の根性が彼をこの時まで持たせていた。しかしメンタル面は無駄に巨大な図体に見合わず、並どころかなり打たれ弱い部類である。無論、この異常な現状はその繊細な精神に対し大きな負担を強いていた。

それが誰かに話しかけられたということで歓喜と希望に舞い上がり、その存在がまやかしかだと思いきらされたことで絶望へと反転した。さらに自分の願望としか思えないその声が、明らかに少女のものだったことが何だか卑しくて、余計に自分に失望した。

この世の理として、物体は高い位置にあるほど地に落ちたとき大きな力を生むものである。それは物質に限った話ではなく感情にも当てはまるのだ。

結論をいうと、ジョージの心は孤独感と絶望でぼつきりと折れて

しまった。

幼い頃から無駄に大きな図体ゆえに孤独だった彼にしてみれば、心を折られることは日常茶飯事である。実のところをいってしまえば、心が折れたところで、それは一過性のものであり時間さえたてば立ち直ることも可能である。

だから、どんよりとした負のオーラを身にまとい怪しげな独り言をつぶやく、いかにも面倒くさそうな四十路の大男は放置されても仕方なかったし、その後も自力で何とかなっただろう。

だがしかし、ジョージにとって幸運なことに『彼女』はとても好奇心旺盛で、カラスのようにお喋り好きで、厄介ごとに首をつつこむのが好きで、何よりも記者であった。

そうだった幸運が重なって、ジョージはもう一度声をかけられた。「あの、下ではなく上です、上」

それを聞いてジョージは暗澹たる気持ちになった。自身の幻想が少女であるばかりか、その少女は己よりも背が高いのだという。そんな少女が存在するわけがない。まさしく彼のコンプレックスが無意識に妄想した偶像である。

ジョージは自分がとても気持ち悪いものになった気がしてならなかった。

それでも少女の言葉にほんの少し期待する部分があった。

地面に貼り付けていた視線をのろのろと剥がし、ぼんやり空を見上げる。

見上げて、彫りの深い顔にある小さくつぶらな目は点になった。

「……ええー？」

木々を背景に少女が浮いている。肩まで伸びた黒髪に意志の強そうな赤い眼。10代中頃程度の身長で、ジョージよりも巨大などということはもちろんない。白いシャツにフリルの付いた黒スカート、そして何故か赤い一本下駄を履いている不思議な少女だ。

少女はほんのり呆れたような、それでいて面白いものを見つけたような表情でジョージを見つめていた。

一方のジョージはといえば、完全に予想外の事態に呆然としていた。宙に浮く少女などそれこそ妄想の産物でしかありえない。だが、当の少女は強烈な存在感をもって幻想ではないことを主張しているのだ。

少女は彼の当惑に気付いたのだろう。何やらうさんくさい声音で話しかけた。

「いつまでも頭上で、というのは失礼でしたね。今すぐ降ります。

あ！ スカートの中はのぞかないくださいね」

はきはきとした口調に意識を取り戻し、ジョージは改めて下降する少女の姿を見た。彼からすれば相当小柄で幼いが、言葉からははつきりとした知性と大人びた印象を受けた。そういえば日本人は幼く見えるんだっただか、そこまで考えてジョージはようやく少女が日本人らしいことに気が付いた。会話に使用している言語は日本語である。

(じゃあ、やつぱここは日本なのか?)

思案をめぐらすジョージの目の前で少女は穏やかに着陸した。一本下駄の齒が地面を噛み、カツリと小さな音が立つ。

ここでジョージは少女の手にカメラを発見した。それはずいぶんと古めかしく、年頃の女の子が愛用するような物には見えない。訝しげに少女を見やれば、にこり、ではなく、にんまり、とどこか怪しい笑みを浮かべている。

自然後ずさったジョージに感付いたのか少女は慌てることなく清純そうな笑みを作り直した。

「これは失敬を。まだ、名乗っていませんでしたね」

一見人畜無害そうな少女ではある。だが、思い返してみればこの少女はあまりにも不自然な存在である。人の気配がない山奥に一人で現れ、宙に浮き、大人でさえ恐れる強面の男に平然と話しかける。そもそもこの少女はどこから来たのか。木の上から、それとも空から。

ジョージは自然と身構えていた。明らかな警戒態勢である。これ

までジョージは危険な目に会ってきたが、注意はしても警戒することとはなかった。その理由として性格が楽観的なこともあるが、一番の理由は単純に強者だからであった。弱さはあくまで精神的なもので、人間という生命体としてはトップクラスに恵まれた肉体を持っているのである。

それでも、ジョージは理性と本能の両方で少女を警戒すべきだと判断した。そのきっかけがにんまり笑顔に少し怖気づいたことだというのは格好がつかないが、元来そういう男である。

「おっと、決して怪しい者ではありません。私、烏天狗の射命丸文（しゃめいまるあや）という者です」

一方で少女は警戒を敏感に察知すると、それを解すように、前言通りに自己紹介をした。

ジョージにはカラステングというものが何だかはわからなかったが、少なくとも少女に敵意はないらしいことを知り肩から力を抜いた。

「……アヤ、か。そうか。そうだな。こんなかわいらしい子があんなでもない化け物のわけがないよな」

そう言つて安堵する姿に射命丸文（と名乗った少女）は目を細める。本当なら先刻の怪しい笑顔を浮かべるところだったが、それは目前の大男を警戒させてしまうので我慢した。

そんなことには気付かずジョージはたはたと苦笑いをした。

「いや、悪かった。私はジョージ・サンランド。あー、アメリカ出身だ。まあ見ての通り小心者だよ」

筋肉もりもりの身長2メートル半、40歳過ぎの巨漢がのたまった。

「ところで、情けないんだが私は迷子なんだ。ここがどこかわかるかい？」

頭を後ろ手にかきながら自身よりもずっと小さな相手に教えを乞う。それは確かに情けない姿だったが、妙に愛嬌のある光景でもあった。

緊迫していた空気はどこへやら。ほのぼのとした空気の中で、文は笑顔のまま告げた。

「ええもちろん。ここは妖怪の山ですよ」

「へえ、妖怪の山かあ。聞いたことな …… な、何？」

聞いたことのない地名。だが、妖怪という言葉の意味はそれなりに理解しているジョージはうるたえた。彼流の認識でいうとジャパニーズモンスター、要するに日本の怪物である。

対して文はジョージの反応を見て得心いったようにうなずいた。

「やはり“外”の方でしたか」

「そ、外？ なあアヤ、ここは日本 …… というかお前さんは日本人だよ、な？」

くすりと意地悪い笑み。文は笑顔のまま告げた。

「いえ。確かに日本で間違いないかもしれませんが、その言い方だと多々語弊がありますね」

冷や汗を流すジョージに構うことなく文は言葉を続ける。

「ここは幻想郷。そして私は烏天狗」

文は笑顔のまま告げた。

「妖怪です」

2話「天狗風」（後書き）

ちよこちよこ補足なんかをば。

天狗風　突然吹き降ろす旋風。

楽観的　ジョージは豆腐メンタルですが、あくまで臆病なのであって悲観的というわけではないです。単に鈍いだけかもしれません。またボコボコに凹みぽつきり折れる軟弱な精神ですが、それは性格的な話で、根性だけは人一倍です。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6708x/>

東方巨漢譚

2011年11月9日03時10分発行